

田辺天神山弥生集落

森 浩 一

調査の開始まで

田辺町は郷土史研究と文化財保護に熱心な町である。町民で組織された郷土史会は、昭和三十四年に『田辺町郷土史古代篇』を発行し、町民の啓蒙と文化財行政の基礎資料にしようとした。京都府下では、土地柄を反映して、文化財保護といえば、神社仏閣だけ大切にしておればよろしいと思いがちで、また実際に歴史教育の貴重な資料である古代の集落や古墳が京都府下では次々に破壊されており、埋蔵文化財の保護行政では近畿地方では取組みのおくれた後進地なのである。先日も文化史研究実習の授業で「大秦^{たてま}地方の古墳を通して古代豪族の秦氏^{はた}を考えよ」というテー

マを一回生に与えた。数回文献と地図をもつて洛西の地を踏査した学生たちは、あるはずの古墳が無いと報告する。よく事情をきくと、学生の調べ方が不十分ではなく、ここ数年の間に土木工事で消滅していたのである。このような状況のところが多いので、田辺町の埋蔵文化財への取り組みがいっそう輝いて見えるわけだが、これから述べる天神山遺跡もすでに『田辺町郷土史』の三十九頁にほんの数行ではあるが説明がある。それは「天神山頂上妙覚寺の墓地より櫛目波状文のある弥生式土器の小破片発見」とだけあるが、これだけの記載が弥生集落の存在の可能性を世にしらせ、そしてその消滅を防ぐための端緒となつたのである。

天神山遺跡の所在地は、やがて近鉄が買収して筒城ヶ丘住宅地として造成工事が開始された。理想から言えば、工事計画の前に、遺跡の範囲を調べてからそれをこの形で開発計画をたてねばならないが、保護行政側に積極さがなければこれは実現しない。この工事中、田辺町の人たちは、工事場のパトロールをおこない、また京都府庁へ担当官の派遣の要請をしてくれたとも二ヵ月を経過しても連絡



田辺校地の遺跡発掘風景

がなかったと言う（『三山木弥生遺跡』による）。この工事では、まず幹線道路の切通しをおこなったが、そのため集落の北東部が失われたのは遺憾なことであった。地元の研究者はついにたまりかねて、道路断面にあらわれた遺構を発掘し、世論を喚起しようとした。同志社がこの遺跡をも含め、広大な田辺校地を買収したのはその直後のことであった。

調査はこうして進めた

天神山遺跡が田辺校地内にあることを知って私は同志社本部へその重要性を申し入れ、さらに広大な用地内に別の遺跡があるならばそれも予め保護する利用計画をたてるため遺跡の分布調査を開始した。昭和四十一年十二月のことであった。私は、文化史専攻学生の協力で表面にあらわれたわずかな兆候から地下の遺跡を予知するという方法をとリ、そのため反復して丘陵上を歩いた。この調査結果は、同志社本部へ提出し、今後の調査と保護対策も附載しておいた。その後約一年の空白があるけれども、この間、大阪府和泉市の観音寺山で西日本最大の弥生集落を発掘するこ

とに成功し、この調査の主力となった本学の文化史専攻の学生たちはこの方面の発掘技術では貴重な経験と自信を深めた。昭和四十三年七月、まず前記の観音寺山集落の最後の調査を終るとひきつづき福井県小浜市、和歌山市、滋賀県マキノ町において、それぞれの古代遺跡の調査をおわり、八月末から田辺天神山遺跡の発掘を開始した。今回も文化史専攻のうち考古学を研究する学生が主となり、延約二百五十名の学生、人夫約五十名が参加して第一期調査を九月二十日に終わった。

住居と集落

近鉄京都線興戸駅を下車、道を西方へると、国道に出る。それを少し南へ進むと、同志社校地の入口がある。それから幹線道路を登ると、右側に女子大の合宿所、左側に一面が切通し、他の面は雑木の茂った小高い丘陵がある。天神山遺跡はこの丘陵の上にある。駅から約十分のところである。この丘陵は、さらに東方につづいていて妙覚寺と日光寺とがあり、その附近の地下にも弥生集落のびているものと推定される。この弥生集落があるのは、丘陵でも海拔八十メートルより上の

平坦面である。木津川流域の平野を見おろすという位置では、最高所に近く、そのため見晴らしはよいが、耕地への距離、飲料水の確保、大風の時の問題など日常生活の上では不便があったはずである。弥生文化は周知のように日本で最初の水稲栽培をおこなっており、当時はまだ灌漑技術が未発達であったため、集落は水の利用しやすい低湿地にあることが多い。これは弥生集落だけの特色というより、今日の日本の農村でもその多くは低地に立地しているから、稲作のもたらす自然の形とみた方がよい。したがって、田辺天神山のような集落地形は本来の弥生集落にくらべると特異な存在であるので、考古学ではこれを高地性集落（丘陵形と山地形に分類することもできる）と呼んでいる。同志社校地内にある弥生集落は約二四〇〇平方メートルにひらがり、今回その三分の一を発掘したが、すでにその範囲内だけで九戸の住居址を確認し、そのうち五戸の調査を終った。有名な静岡市の登呂集落は十二戸で構成されるから、全域の調査が進めば、登呂を上回ることはほぼ確実である。これらの住居はいわゆる堅穴式住居である。これは説明するより、実地で

見てもらった方がよく分る。竪穴式住居は、円形と方形の二種あるが、天神山集落では円形二戸、方形五戸の輪郭が分っている。このうち、四角住居址は、直径十二・五メートルあって、円形竪穴としては弥生時代最大である。これらの住居は、改築で住居面積を拡大した跡がよく分るが、今日の私たちの家が貯えや家族数の増加で増築するのに似ている。この時代の住居は、掘立柱を使っているため全面的な建て替えの時期が案外早くやってくる。すると別の竪穴を掘ってその上へ屋根を架ける。現代人の常識では、その当時は土地がいくらでも使えたのだから、新しい個所に竪穴を掘ればよいと考えるだろうが、天神山集落では一号と六号、二号と四号と七号がほぼ同じ場所で重複している。この場合、古い竪穴を埋めてから少し位置をずらして次の竪穴を掘ることもあるし、古い竪穴の床よりさらに深い位置まで新しい竪穴の床を掘ることもある。あるいは逆に古い竪穴の床に盛土をしてある場合もある。これは、竪穴構造を知りだけでなく、竪穴の変遷、集落を構成している単位の抽出など、研究上の大きな手がかりなのである。

天神山集落は、利器としての石器がほぼ使われなくなつて、鉄器に移行する時期であるため、石器が鉄器に併用されているが遺物は多くない。石器ならば破損するとすぐに捨てられなくても、鉄器は何度も鍛造し直せるからである。しかし壺・甕・高杯などの弥生式土器や石鏃・砥石・鉄斧・鉄刀子（ナイフ）・銅製の飾り金具など珍しい遺物が出土している。遺物から年代を推定すると西暦三世紀ごろに集落は営まれていたようであり、その後の時代に人間が生活した形跡はない。

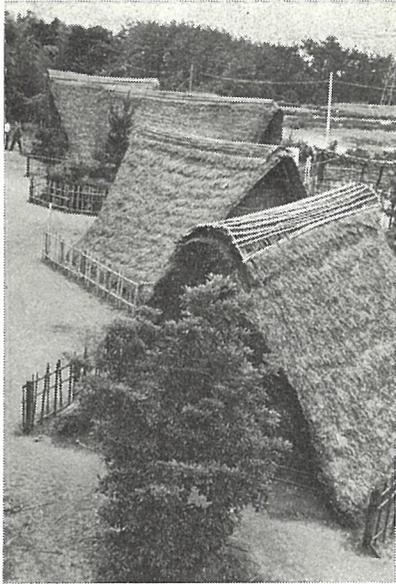
集落が営まれた歴史的背景

有名な中国の歴史書『魏志』には西暦二世紀後半に倭国に大乱があり、一時はおさまるが三世紀中頃には再発していることを伝えている。この大乱についてはそのほかの中国史書にも記載され、また国際的な関連から実在の事件であったことはほぼ疑えない、ところが、大乱の及んだ地域やその規模などはわずかな文献資料からでは全くと言ってよいほど分らない。しかし最近十年間で、西日本には高地性集落がある時期だけ営まれていることが次々に判明してきた。それは大分県を西限



静岡県登呂遺跡（弥生式）

として、山口、広島、岡山、香川などの瀬戸内海沿岸地方、さらに兵庫、大阪、和歌山など大阪湾沿岸に集中し、田辺天神山はこれら一群の高地性集落の東限に位置しているのである。しかもこれらの高地性集落は大阪の観音寺山や田辺天神山のように三世紀にまで下るものもあるが、大部分は西暦二世紀ごろに営まれたものである。このような地域的な片寄り、その時期が倭国大乱の時期にほぼ一



浜松市蜷塚貝塚（縄文時代）

致していることから、高地性集落はかなり長期間の動乱状態が生みだした防禦的集落ではないかと想像されるようになった。このような集落は畑作で生じたとする仮説もあるけれども、それなら一時期に限られた現象である点が説明できない。私は、先に述べた観音寺山集落で、山の斜面に掘られた巾三メートルの深い濠を掘出したけれども、それによって高地性集落の性格はもはやほぼ決定されたと考えている。この動乱の中から、小国家統合の気運がたかまり、やがて大和に政権の中心があらわれるのである。このように書くとは

単だけれども、高地性集落を築いた人たちのたどった歴史的な運命はよく分らない。つまり、この人たちがやがて後に古墳を築き、彼らの間から支配者が出現するのか、それとも高地性集落に住んだ人たちと、のちに古墳文化をのこす人たちは別物だと考えるかで日本の建国の基本的な把握が異なるのであり、田辺天神山は考古学だけではなく、日本歴史の証人としてその価値はきわめて大きいのである。

今後の問題

京都府下で弥生集落の発掘に成功したのは田辺天神山が初めてである。古代集落が学校用地内にあることは、近視眼的には損失ではあるが、これを全同志社の歴史教育の生きた教材に活用できるならその利益は大きい。もちろん、同志社だけでなく、一般社会にも公開して、正しい日本歴史を自分で考える場所にしては

どうか。調査後約十日目にして同志社本部の奔走で集落址には柵をこしらえ、一部には芝生を植え、崖には応急の防災工事もおこなわれた。世間一般で、遺跡は邪魔なものというとらえ方が強い時に、貴重なものだとの実践例を示したことになる。私の構想では、この集落は調査が終われば、科学的な保護施設をこしらえ、一部には古代の復原住居も建て、さらに附近には出土品の収蔵庫をかねた博物館を建ててもらいたい。もちろん、ここには田辺天神山から出土した遺物を陳列するとともに、各時代の遺物もならべた考古学資料の殿堂にしたい。そこでは、大学はもとより、中学や高校も半日くらいはたっぷり学習してもらえただけの内容を備えたいものだと考えている。もし考古学という言葉で実感の湧かない人は、人類ののこした物質資料と頭の中でおきかえてみてはどうか。

（文学部助教授・考古学）

〔追記〕同志社EVE期間中におこなった二次調査で中央広場をとり囲む十三戸の竪穴からなる古代集落の全容がほぼ明らかとなり、復原家屋の設計も福山敏男博士によって進められている。

北原白秋と俳句

那須乙郎



句友M氏からうすっぺらな句集「竹林清興」
を読んでみるようにと手渡された。見れば、
北原白秋であることに私は驚いた。という
のは私は白秋が俳句を作ったということをも、
全く聞いたことがなかったからである。

しかし、考えてみれば何の不思議もないこ
とで、あれだけの詩才に恵まれていた白秋で
あれば、詩や短歌だけでなく、俳句も作って
いたのが不思議でも何んでもなく、当然だと
思えるのである。ただその句数がすくなくして

今まで眼にふれる機会がなかっただけであ
る。

思うにもし、生まれながらの詩人という形
容が許されるならば、白秋こそ正にこの詩人
と言えよう。「この詩の道を行く外に、私は
生れて何一つ与えられていなかった。これが
ために私はただ一すじに詩に仕えて来た。詩
に生き、詩に痩せ、詩に苦しみ通して来た」と
白秋詩集の自序に述べているが、ここに示
されている詩というのは、むろん、俳句を指
しているのではなからう。しかし俳句といえ
ども詩や短歌のひまの、ただの余技というに
は、あまりにも立派な作品が揃っていた。い
わゆる習作の域を脱していると見るのは間違
いであらうか。

私はこの句集の三百余句を詳細に見て行く
うちに多数の佳品にめぐり合った。そこには
白秋らしい独自の句境を展開しつつ、清新さ
をかなでていて、かえって、いわゆる俳人臭
のないすがすがしいものもあるように感じら
れ、気持ちよかった。でも一部のものは、どこ
となく物足りなさや、表現の面で面白くない
と率直に思った。

白秋の初期俳句作品には、やはり十七音に

納まるものが多く見受けられ、白田亜浪の「石楠花」にも投稿した由、聞き及んでいた。

向日葵や柘臈きゆく垣の外

短夜や鏡の下の火取虫

日の光ばかりそよぐなり青芒

紫陽花に馬が顔出す馬屋の口

蓮咲くや月に在所の朝けぶり

これらの句は、いわゆる定型であり、表現にも「や」がわりあいに使われている。大正七年（当時三十四歳）白秋が小田原に居を定めた頃のものであり、いわば初期作品である。小田原に到着くまでには、苦難流離の生活の連続であったが、この頃から「赤い鳥」や「雀の生活」など出版して、生活にややゆとりができたらしく、かの有名な「木兎の家」もまた小田原に建てることができた。

しかし、生来自由奔放な白秋は、定型句に甘んずることができなかったらしく、だんだん定型をはみ出す作品を多く作るようになって行った。

瓦斯燈に吹雪かがやく街を見たり

枯藁やひょうひょうとして風遠し

紫蘭咲いていささかは岩もあはれなり

たまさかに浪の音して夜の雪なり

蛸が二つ啼きまた一つがこもこもに

ここに上げた句は、大正十年（当時三十七歳）から大正十一年にかけてのものである。ここには全く定型が守られていない、これらの句を見るとやはり白秋のもつ深い詩心にふれる思いがして感動を覚えずにはいられない。

また、

寒竹の下ゆく水となりけり

という作品があったが、これを同時に短歌にしたものが歌集に

おのづから水の流れの寒竹の

下ゆくときは声立つるなり

を見出して、両刀使いの名技に子規を思い出したことであった。もちろん私にはどちらが先にできたものか知るよしもない。

この頃からの白秋俳句は、前にも示したように、滋味な閑雅な作品に漸次変化して、彼の若い日の詩集や歌集に見られるような、異国情緒や、官能的な絢爛としたものではなくなっていることに気付く。

このことは、大正十年（当時三十七歳）出版の歌集「雀の卵」の序に書いているように「つくつく慕わしいのは、芭蕉である。光悦で

ある。大雅堂である。利休、遠州である。（中略）真に自然に還って一木一草のあるが儘におれをその中に置く。そうした自然にまかせた、あなたまかせの境地こそ、真の芸術ではなからうか」と年齢とともに、彼の詩精神が、たえず成長し、昇華して行っていることから判じて、誰もがうなずけるのではないだろうか。

なお、字余りの表現から、更に自由律俳句に変わって行ったのは当時、小田原に荻原羅月がおり、この羅月と交遊する機会をもつに及んで、この自由律口語俳句が、本来の性格に合致したためと察せられる。

バラックの寺が出来た梅が咲き過ぎた
七面鳥が向うむいてふくるる焚火
林檎をかちつて夜、波の音がしてある
新入生と母とが戻る畔の櫛子だ

月夜の星大きくて蛙の遠音

二方に梟の鳴く月なり

土筆が伸び過ぎた竹の影うごいてある

篋子が這ひ出した梅の新緑

ここに出てくる「篋子」というのは、白秋の長女の名前でこのように自由に詠っている所など、白秋らしきを感じずにはいられない。

菩提樹の新芽だ引越すにきめた

この句は大正十五年四月(当時四十二歳)、

小田原から東京谷中天王寺墓畔に転居を決意したときのものである。したがって小田原の最後の句であろう。東京へ出てからは

伸び過ぎて揃はぬ要冬青蝶がもつれて

麦だけ青い蜜柑山かすむ

樟の芽の上の海すこし荒れてゐる

杉葉へ落ちた干物しろい

写楽の絵見てゐる春の蚊きいて

牡丹の葉が目立ってきた日の照り

これらの作品に見るように、旺盛な作句心をみながらし、詩情はいよいよ強靱に、深い凝視の中に、自由に詠っている。私は今更のよ

うに、白秋作品を見直すことができた。最後に

墓のうしろへまはる

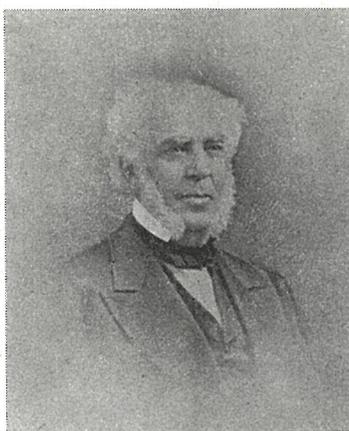
みじか日の墓原ぬける

の二つの作品を比較鑑賞しながら、いずれも

詩情の豊かさに賞讃を惜しむことなくこの稿を終る。

(同志社女子中・高校教頭)

P・パーカー氏は、一八七四年(明治七年)、新島先生がアメリカより帰国に先だちバーモント州ラトランドで開かれたアメリカン・ボード第六五回年会の席上、日本にキリスト教主義による大学の設立を訴えられた際、いちばん最初に一千ドルの寄付申入れをされた人である。



MR. PETER PARKER

危禍福はひとり政治の改良に存せず、ひとり物質の文明の進歩に存せず、実にもっぱら国民教化の力にあるを信ず。陳してここにいたり、余はおほえず涙をのみ、更に一步を進めていわく、ゆえに余もしわが国に帰りたらば、誓ってこの事業に向つて微力を尽さんことを欲す。満場の諸君、余が赤心を看取し、

さいわいに翼賛するところなきか、と。」(同志社大学設立の旨意)より)

「語いまだつきざるに聴衆中たちまち人あり、背後に直立して揚言すらく、新島氏よ、余いま氏が設立せんとする学校のために一千ドルを寄付すべし、と。これなんワシントン府の貴紳医学博士パーカ氏にてありし

……」(同志社設立の始末)より) 現在、この写真は新島先生遺品庫に保存されている。

「思うにわが同胞三千余万、将来の安